

「さまよえるユダヤ人」伝説

中 谷 拓 士

は じ め に

まずは二つの引用から始めたい。

「1929年6月初め、ロンドンでのこと、スルミナの好古家であるヨセフ・カルタフィルスなる者が、小型四つ折り版のポープ訳『イリアッド』（1715–1720年刊）6巻本をリュサンジュ公女にお見せした⁽¹⁾。」

これはホルヘ・ルイス・ボルヘスの短編小説「不死の人」の冒頭である。いつ、どこで、誰が、何をと、物語に必要な情報がきちんと与えられている。これだけではごくありふれた一文に見える。だが、「ヨセフ・カルタフィルス」なる名が、偶然に選ばれたのではないとすれば、この叙述にはあざといまでの作為があると言わねばならない。というのも、次の引用文との奇妙な一致に思いがいたるからである。

「キリストの死後、カルタフィルスはキリスト教徒となり、使徒アナニアによって洗礼を受けると、ヨセフと名乗った⁽²⁾。」

これは同一人物なのではないか？ そんな疑念がどうしても頭をよぎるのである。もちろん、1929年6月のロンドンに現われた「灰色の目に灰色の髭の」男は虚構の産物にすぎない。しかし、これは「不死」をめぐる物語である。カルタフィルスが実は伝説上の不死の人であるとなれば、この命名自体が意図的であってもなんら不思議ではないのである。

ところで、これら二つのテキストの間に横たわる時間的な隔たりは700年を越えている。後者は年代記作者マシュー・パリスが書き留めた1218年の日

付をもつテキストである⁽³⁾。アルメニアの大司祭が英国を訪れた際、セント・オルバン修道院の院長にもてなされたが、その折、「主の受難に立ち会い、(…)キリスト教信仰の証人として今なお生きている名高いヨセフ⁽⁴⁾」が話題となった。すると、その男ならアルメニアにいて、大司祭もよく知っている人物だということになり、男の事績が語られる。パリスはそれをラテン語で書き残したのである。

当の人物は、その後、時代を経るにつれ、アハシュエロス、イサク・ラクデンといった名を持つことになるが、人々には通称「さまよえるユダヤ人」と呼ばれてヨーロッパ中に知られることになる。以下は、この伝説をめぐる粗描である。

1. さまよえるユダヤ人とは

さまよえるユダヤ人のイメージは「一世紀来、毎年無数に刷られて至るところに広まっている図像」だとシャンフルーリは書いた⁽⁵⁾。「無数」と訳したが、使われている語は **des milliards d'exemplaires** である。逐語的に言えば「数十億部」となる。ともかく、おびただしいと言ってよい部数の民衆版画が伝播したことは容易に推測がつく。版画だけではない。トロワその他の町で発行され、一部2ソルで売られた青本もある。こうして、「さまよえるユダヤ人」は19世紀のヨーロッパでは知らぬ者のない伝説として定着する。関連する文献には事欠かない。というか歴大だと言えるだろう。シャンフルーリでさえ、本腰を入れて調べるなら一生かかると嘆いたほどである。ただ、日本ではほとんど馴染みがない。それゆえ、まずはこの男の大まかな輪郭を述べておくべきだろう。

土地により時代によって、細部の異同こそいろいろあるが、大筋のところ次のようになる。元となるのは、いわゆる十字架の道行きの大詰めの部分である。

イエスが捕らえられ、^{たっけい}磔刑が決まる。イエスは十字架を背負ってゴルゴタ

(カラヴァリオ)の丘に向かう。途中で、疲れ切ったイエスが、ある家の門口で、少し休ませてほしいと家の主に頼む。「行け、極悪人め!」と主人はにべもなく言い放つ。イエスは言う。「行って休むことにしよう。だが、おまえは歩くのだ、最後の審判の日まで」と。こうしてユダヤ人はその日から永遠に世界をさまよう者となる。

細部の脚色は多様である。だが、伝説の人物の核となる変わらぬ部分は、ほぼ次の4点である。

- 1) エルサレム生まれのユダヤ人であること。
- 2) イエスを侮辱したこと。
- 3) その罰により、さまよう運命になったこと。
- 4) 不死であること。

ここで断っておくと、上で引用した最古の文献である中世の「ヨセフ」は、アルメニアに定住し、寡黙で主の教えに従う孤独な禁欲者のような印象を与える点で、後世の伝説とは相当に異なっている。この改変について、シャンプルーリは「われわれが知っているさまよえるユダヤ人は、もっと血なまぐさい乱闘をも無傷で通過し、自然の大災害に居合わせ、人間のなかに累々たる骨しか見ない」と書く。さまよえるユダヤ人は「もっと劇的に、人間的になる」というのである⁽⁶⁾。

この改変は、当然のことながら、永遠の彷徨すなわち不死性という特徴をいやが上にも際立たせて物語の核としたことに由来する。そうであってはじめて、この伝説は真に伝説と呼ぶにふさわしいものに昇華され、大衆化への道筋をつけたのである。

こまごまとしたヴァリエーションは多岐にわたる。その一つに職業があるが、最終的に定着したのは「靴屋」、正確には「靴直し」である。イエスに対する侮辱の言葉とイエスの返答などは、すこしずつ異なっている。

「さまよう」という属性は後世の発案に属するが、さまよい方はいろいろで、たとえば、かつて行商によって、フランスの津々浦々に行き渡ったトロワの青本によれば、さまよえるユダヤ人アハシュエロスが世界を遍歴して、メキシコ

の次に日本にまで脚をのばしているのである。

この彷徨^{さまよ}うという特性を示す形容詞は、**Juif-Errant** と、ハイフンで前の語と連結され大文字になっていることが多い。それゆえ、この表記はほとんど固有名詞に近い。たとえて言えば、聖ペテロの「聖」と同じような機能をもつと言ってよいのである。そのためか、「さまよう」という動詞、形容詞は、どちらかと言えば象徴的な働きにとどまり、テキストでは「歩く」**marcher**, **cheminer** という言葉が中心で、それが「行く」「通り過ぎる」「横切る」「経巡る」といった類縁語を呼び寄せる。それには「たえず」という語がしばしばくっつく。したがって、「さまよう」を言い換えれば、「歩き続けて止まらない」こと、そしてこれが彼の背負った劫罰であり宿命だと言うのであれば、「止まれない」を含意する。青本のさまよえるユダヤ人は言う。「座っているのに、わたしの脚は動いているのです⁽⁷⁾」と。後で触れる嘆き節のしめくくりはこうである。「時間がわたしを急き立てます。(…) 立ち止まっていると、とても苦痛なのです⁽⁸⁾。」この苦痛を、青本のアハシエロス「灼けた炭の上にいるみたい」だとも言っている。

さて、たえず歩くこと、足を止めてはならないことから永遠の彷徨が抽象され、つぎにはたえず生きつづけることから不死が出て来る。彼は死なない人なのではなく、死ねない人となる。死ねずにさまよいつづけるのだから、ほとんど亡霊のようなものである。妖怪にならないのは、その存在が人々の憐れみと崇敬との対象だからである。こうして、「さまよえるユダヤ人」は自然を越えた非現実の物語でありつつ民衆の歴史を生きることになる。すなわち伝説となる。

2. 青本の「さまよえるユダヤ人」

トロワの青本では、舞台はハンプルク近郊の町である。そこの教会で説教に聴き入る不思議な人物がいる。男は「イエスという名を耳にするたびに、ひどく呻きながら胸を叩くのだった⁽⁹⁾。」この版の元になっているのは一通の書簡

である。それは学生の頃に「肩まで垂れる長い髪の裸足の男⁽¹⁰⁾」に会ったというある聖職者の体験談を聞いた者が人に宛てて出した手紙である。

トロワの青本自体に発行年はないが、最初に刷られたのは 17 世紀ではないかと思われる。何度も使われる *d'abord* という語も、現在とちがって古典主義時代に用いられた「ただちに、すぐに」を意味している。

このテキストでまず目に付くのは、固有名詞の多さである。人名、地名などを合わせると、50 を下らない。といっても、リアリズムのような観点から、具体的な現実性を強調しようとしているわけではない。それは聖書的な歴史と、地理的な広がりとを与えるためである。前者についてはキリスト教の成り立ちの反復（読者にはおさらい）であり、後者は世界遍歴の広さを示している。どちらも読者の好奇心をかきたてるための素朴な腐心であるように思われる。

地理から先に片づけると、とりわけ異国の奇妙な風習がつぎつぎに語られる。たとえば、家族で男子はひとりしか残さず、あとは殺して女兒だけを育て、それも 12 歳になると、すべて右胸の乳房を切り落として弓を容易にひけるようにするアマゾネス。殺人を犯した者は自ら縊^{くび}れてしなねばならぬ習俗をもつレバノンらしき国、父親が死ねば息子が母親と、母親が死ねば娘が父親と結婚する *Samagote* なる国、サハラとおぼしい砂漠、鳥に与えるために自分の娘を四つ裂きにし、その肉片を田野に撒き、神々への供物とするマルハド。神と悪魔とを二つながらに崇拜するメキシコ……。かなり奇想天外な、あるいは猟奇的とも思える土地の風習を伝えることがけっこう多い。ちなみに、日本は子殺しの国である。日本では「二人の子供を殺す母親を見ました。なぜなら、彼女は子供たちに食べ物を与える事が出来なかったからです。こうした殺人は、この国では許されているのです⁽¹¹⁾」と、アハシュエロスは語っている。子を養う手だてをもたないとき、父親や母親はわが子を殺す習慣があるというのである。われわれには、かつての日本の風習でもあった間引きのことだすぐにわかる。

地理的な報告は、ややもすると、読む者の関心を引くために、ことさら羅列

するといった趣があるが、歴史的な事柄に関しては、旧約聖書のモーセや、新しいイスラエルの王の誕生を恐れて、3歳までの男児の皆殺しを計ったヘロデ王などへの言及もありはするものの、かなり珍しい逸話的な事柄の方が多く語られる。たとえばアハシュエロスが10歳ばかりのとき、東方の三博士について行き、イエスの誕生を見たこと、彼の父親が大工であり、おなじ仕事に従事するイエスの父の大工ヨセフとともに仕事をしたことがあることなど、史実というよりきわめて稗史的なこぼれ話を拾い上げるといった印象がある。

それを尋常でないロマネスクな奇譚として展開したのが、ユダの出生譚およびその後の生涯と禁断の木の実の三本の木の話である。「最後の子であるユダを身ごもったとき、母親は、王冠を手にとると、それを地面に投げ捨てて足で踏みにじる子を産む夢を見た。その子は父親のところに行くと、彼を殺めてしま^{あや}う。」夢の意味をあちこち尋ねてまわった末、「想像しがたい悪事のすべてを犯す息子」を持つことになるだろうと言われる⁽¹²⁾。

相談した結果、夫婦は生後十日のユダを、小さな筐^{はこ}に入れて、地中海にそそぐヨルダン川に流す。これはモーセの事跡の反復である。筐はやがてクレタ島へと運ばれていく。ちょうど島の国王夫妻が散歩中にそれを見つけ、中に赤ん坊を発見すると、手元で育てることにする。一歳年上の王子とともに育ったユダは、しだいに盗みを働くようになる。王子の内報により彼を調べた王は、その事実を発見し、彼を鞭打ちに処して、こう言う。「おまえはわしの子ではない。川から拾い上げた捨て子でしかなかったが、慈悲の気持ちから、宮廷で育てられたのだ⁽¹³⁾」と。

ユダはすべて王子のせいだと逆恨みし、これを森の中で撲殺してしまう。逃亡の果てに、彼はエルサレムに辿り着く。それとは知らずに、生まれ故郷に戻るである。

主人持ちの身となるが、あるときりんご^{りんご}を買いにやらされる。店に行ってみると庭にはりんごがたわわに実っている。買うのは馬鹿らしいと思ったのだろう。塀によじのぼって実をもぎ始める。「どうしておまえはわたしのりんごを盗むのだ⁽¹⁴⁾」と店の主人に詰問される。それが実は彼の本当の父親だったの

である。ユダはそうと知らずに、父親の頭をメッタ打ちにして瀕死の重傷を負わせる。翌日、母親がユダの主人を訪れ、ユダの暴行によって夫が死にかけていると訴える。裁判にかけられたユダには、店の主が死ぬようなことがあれば、未亡人と結婚すべしという判決が下る。こうして、父親殺し、母親との結婚すなわち近親相姦が成就する。もちろんソフォクレスの『オイディプス王』が下敷きとなっているだろう。一種の文学的受容であるが、これもおぞましさ強調し、一般大衆の猟奇的な関心をいやが上にもそそろうとする手だてだともてよい。すでに挙げたような奇異な風習の列挙も、死にかかわるものが圧倒的に多い。

ちなみに、ユダが自分の息子だと母親が気づくのは、捨てたわが子同様、ユダの足の中指の箇所二本がくっついていたからである。加えて、こめかみにある灰色のあざも、事実を証明していた。その後、イエスに従って改悛したかにみえたユダは、主を裏切り、自ら^{いし}縊死する。「腸が腹からとび出していました⁽¹⁵⁾。」目撃者であるアハシュエロスは、そう語っている。

こうしてさまよえるユダヤ人は、罰を受けた者、永遠の放浪を強いられた者である一方で、聖書的な事跡、とりわけイエスをめぐる言説の主、証言者として珍重されていくのである。それは単なる証言者であることを越えて、彼が遍歴する土地の盛衰の証言者としても利用されることになる。グリム兄弟が収集した言い伝えは、その間の事情をよく伝えている。「その昔、マッターホルンの麓にあるマッターベルクという氷河のあるところに、町があった。言い伝えでは、さまよえるユダヤ人がこの町を通りかかったとき、この次に来るときは、今、家々や通りがあるところにはもう木と石しかないだろう。その次に来るときには、もう雪と氷以外、何もないだろうと。現在ではその通りになっている⁽¹⁶⁾。」

このように、その土地土地で、さまよえるユダヤ人は土地に固有の伝説の種を撒いても行く。それと同時に、時を隔ててエルサレムの盛衰をふたつながらに眺める者として、忘却の淵に沈んだ記憶の表層を波立たせ、時の移ろいと失われたた夢へのノスタルジーをかき立てる役目も負うのである。

次に、禁断の実の木の逸話に移ろう。

これはさまよえるユダヤ人が幼い頃、読み書きをおぼえ、祖先から伝わる羊皮紙を綴じた大きな書物に載っていたという話である。史実から言えばパピルスの時代であり、羊皮紙は後世の発明であるが、目くじらをたてるほどのこともない。さて、エデンの園を追われたアダムとイヴはアベルとカインを子に持ったとき、どちらかがメシアになるだろうと期待した。食べるなど禁じられた木の実を食べ、神の言いつけに背いた自分たちの罪を、メシアとなった子に許してもらおうと思ったのである。だが、カインはアベルを殺した。希望を絶たれて100年間泣いたアダムは、自分の死期の近いのを悟り、末子のセツに地上の楽園へ行って天使ガブリエルに、もう一度だけ自分を楽園に入れるよう頼んで来てくれと言う。セツは伝言を携えて行くが、天使は拒否する。子孫ともども永遠に地上の楽園へ入ることはできないと。泣いて戻ろうとするセツを呼び止めて、天使はこう言う。「おまえの父親はもうすぐ死ぬことになっている。だが、ほら、ここに禁断の木の実の種が三粒ある。父親が死んだときには、この三粒の種を彼の舌の下に入れてやりなさい。そしてそのまま埋葬してやるとよい⁽¹⁷⁾。」

やがてアダムが埋葬された場所に三本の木が育ち、見るも美しい実をつける。だが、その実は苦く、砂まじりだったから食べることはできなかった。その後、幾世代を経て、ユダヤの民は約束の地に来ると、エルサレムを建設する。それはあの三本の木が立っている場所であった。さらに時はめぐり、ヘロデの父アンチパテルが、それらの木を切り倒させるまで、木はそのままそこに立っていた。アンチパテルはその土地を広げ、悪人たちの処刑場とした。つまりゴルゴタ（^{されこうべ}頭蓋骨）の丘である。

われわれはイエスの磔刑につかわれた十字架が、いったい何の木でできているかなど、ついぞ考えたこともない。さまよえるユダヤ人によれば、十字架を造るよう命じられたとき、職人が選んだのは、この三本のりんごの木だったということである。「彼は十字架にかけられました。その十字架は、かつてアダムが埋葬されたその場所に据えられていました⁽¹⁸⁾。」これもさまよえるユダヤ

人の目撃証言である。

ともあれ、このりんごの木のイメージは日差しが洩れはじめた霧の中の風景のように懐かしくも美しい。いわば記憶の中の遠景である。これは民衆の間に生きつづけたみずからのルーツへの郷愁である。人が無意識に心の奥にしまい込んだ幼年時代のような何かであり、だからこそ、単なる迷信であることを突き抜けて、理知では否定しきれない素朴な心性の表出となっているのである。

3. 嘆 き 節

青本の物語においては、一般的な状況の叙述から入り、次に当のユダヤ人の語りに移行する。大半がさまよえるユダヤ人の語りで占められるが、最初と途中、最後の三カ所が外側からの語りである。冒頭の「主歴」*L'an de notre seigneur* という言い方の「我らが」と「われわれの話」の二カ所にある所有形容詞をのぞけば、3人称と言ってよい語りである。語り手を二重化こうした杵物語はやや古い型に属するが、この二重化は嘆き節でも変わらない。

complainte は嘆き唄、哀歌とも訳せるが、ここでは嘆き節で統一する。俗謡の一種ととらえてかまわないので、悲しい民謡というニュアンスで理解すればよい。これは民衆版画には必ずと言っていいほど添えられているおなじみのもので、既存の素朴な唄に合わせて歌う詩である。古くからある叙情的な悲歌のたぐいのものが、時代によっては風刺的に、あるいはビュルレスクな笑いを誘うものにもなり、革命下ではのしりの唄ともなるが、基本的な特質は平俗性であり、詩の形式もおおよそ厳格な脚韻とは無縁である。19世紀に後半には、もう「今日では決定的に見捨てられたように思われる⁽¹⁹⁾」と記されており、いわゆる文学には属さないものだが、一方で「嘆き節というジャンルは、20世紀初頭まで大いに受け、ブリュアンを受け継ぐシャンソン・レアリストに取って代わられた⁽²⁰⁾」という見方もある。文学的な悲壮さは少しももちあわせておらず、民衆的であるゆえの一種の軽みを帯びた嘆きの唄である。そうした嘆き節の中でも、いちばんよく知られたものが、このさまよえるユダヤ人だと

というのが大方の判断である。もちろん「文学」の世界でのジュール・ラフォルグを忘れてはならないが。

ところで、このさまよえるユダヤ人の嘆き節も複数の種類があり、「侍女たち」という唄にのせて歌われた 17 世紀初頭の詩がひとつある。古風な 1 行 10 音綴の平韻からなる 1 連 4 行のものだが、もっとも人口に膾炙したのは全体が 24 連からなる 1 連 6 行、1 行 6 音で交韻＋平韻の **ababcc** 形式をもつものである。これは「狩り」という唄に合わせて歌われた。ニザールによれば、自分の世代の者は子供の頃にそれこそ何度となく聞いたことがあるから、この嘆き節を空でおぼえているという。次にその第 1 連と第 20 連の大意を示す。

哀れなるさまよえるユダヤ人の
大いなる悲慘ほど
驚くようなことが
この世にあらうか。
不幸なさだめは
悲しくつらく思われる。

カラヴァリオの丘へと
イエスは十字架を運んでいた
わたしの家の前を通りかかると
おだやかにこう言った
「ここでわたしを
休ませてはもらえまいか」と(21)。

シャンフルーリは、第 20 連の「おだやか」**débonnaire** という語の使用が、イエスの人となりを示すのに適切きわまりないと感心し、詩句の「デッサンの確かさ、単純さ」を賞賛している(22)。たしかにこの嘆き節には古拙な味わいがある。よけいな枝葉を切り払い、あるべきものだけで足れりとするような無名の詩人の業がある。ここでは詳しく比較できないが、ギュスターヴ・ドレの木版画の入ったピエール・デュボン作『さまよえるユダヤ人伝説』の一節を引きながら、シャンフルーリは友人でもあったデュボンの詩をあっさりと切り捨てている。上に挙げたカラヴァリオの丘に向かうイエスの場面を比べて、嘆き節よりずっと劣っていると明言している。その意見を首肯したい。要するに、デュボンの詩は、妙に「文学」なのである。それはプロローグの第一行からすぐに見てとれる。

草の葉先で露の玉が日の光を反射している⁽²³⁾。

こうしたもっともらしい情景描写は、嘆き節には皆無である。結局のところ、デュボンの詩は言葉数が多く、それだけ装飾性がましているため、嘆き節に比べれば、ややもすると技法的な側面がうるさく感じられる。嘆き節の方はむしろ限りなく裸形に近く、それだけに土俗的な、しかし純朴な「心情」の方がにじみ出てきて、じわじわとまわりに浸潤していくのである。もっともドレの版画は背景の描き込みも密で、意識的に劇的な場面構成がなされており、その点では嘆き節よりもずっと華麗なデュボンの詩といい釣り合いを見せている。しかし、そのドレの木版画も、民衆版画のさまよえるユダヤ人の良質のもの、つまり可能な限り切り詰めて行って様式化したもののがもつ簡潔なつよさに比べれば、劇的效果を強調する誇張性がかえって作品の力を損っているように思われる。

お わ り に

さまよえるユダヤ人を取り上げて民衆版画に触れぬまま終えるのは、いかにも変則的だとそのしりを免れないが、デュボンの詩、ブルターニュの嘆き唄、エドガール・キネの『アハシエロス』その他ともども、また別の機会に譲らねばならない。今回瞥見しただけの嘆き節や民衆版画は、現代の観点からすれば、**19世紀末**に注目されることになるプリミティヴィズムに連なるものと言えるだろうが、しかし、それも言いすぎれば牽強付会ということになるかもしれない。

ところで、その後さまよえるユダヤ人はどうなってしまったのか？ 表舞台からは退いたように思われるが、ボルヘスの例を出すまでもなく、いまでも人々の意識のどこかでは存在しつづけていそうである。たとえば、**19世紀末**では日常的に生きていた証拠がある。現代風に言えばグラフィック・デザイナーであったウージェヌ・オジェ（**1861-1936**）のポスターには、食前酒の広告

にさまよえるユダヤ人を使ったもの（1893年）があるからだ。長髪に白い髭、裸足、片方の手には杖という典型的なこの人物が、もう片方の手に食前酒の瓶をもって歩いている。右下には「**Bittermouth** を飲んで、いつまでも歩くぞ」というキャッチフレーズがついている⁽²⁴⁾。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『人はすべて死す』には、誰が見てもさまよえるユダヤ人の面影がある。数々の血なまぐさい戦闘に身を投じても死ねず、いつも妻やわが子の死を先に見届けねばならぬ男は、この伝説の人物の現代版である。

個人的にはアポリネールの短編小説「オノレ・シュブラックの失踪」にさえ、この伝説の人物がかすかに影を落としているような気がする。罪を犯して逃げ続け、一カ所に留まらず、たえずさまよわざるを得ないオノレは、追いつめられたときにいつでもすぐに脱げるように **houppelande** という昔の外套を着用している。民衆版画にも同じいでたちをしたさまようユダヤ人がいる。

それにしても、この伝説がいつまでもヨーロッパの人々の心に住み着いているのはなぜか？ おそらく巡礼のイメージが重なっているからだろう。じっさい、サン=チアゴ・デ・コンポステラに向かう、例の貝殻を身につけた昔の巡礼者の姿は、民衆版画のさまよえるユダヤ人にきわめて似ているのである。トロワの青本の「さまよえるユダヤ人の物語」と題された小冊子の表紙に付された古い木版画が、巡礼者サン=ジャック、さまよえるユダヤ人のどちらにも使用されていたという記述もあるくらいである⁽²⁵⁾。

19世紀以来、この伝説の人物のありようは、歴史的に長いあいだ世界をさまよったイスラエルの民の象徴とみる見方が一般的である。それも一概に否定はできないが、そういう民族の外部的な表象としてよりも、むしろこれはキリスト教世界（とりわけカトリック教の世界）の人々の内奥に住み着いている心象ではないか。そうでなければ、これほどの広がりは見せなかつただろう。そう思われてならない。

カルタフィルス、ヨセフ、アハシュエロス、イサク・ラクデンは、名前の通り時間的、空間的な境界線を越えるノマド的な存在として多様に生きる。さま

よえるユダヤ人は、遙かな時のへだたりと、誰もがとても踏破できない地理的な広がりとを一身に凝集して歩きつづけている。その一点こそが、人々に畏怖^{おそれ}と憧憬と、憐憫と崇敬の念とをかすかな記憶のように呼びさすのである。

注

- (1) ホルヘ・ルイス・ボルヘス「不死の人」(短編集『不死の人』所収、土岐恒二訳、白水社、1985)を参考にして、仏訳本より訳出した。Borges, «L'Immortel» in *L'Aleph*, traduit par Roger Caillois et René L.-F. Durand, revue par Jean Pierre Bernès) (Œuvres complètes, Gallimard, 1993, p. 563)
- (2) Charles Nizard, *Histoire des Livres populaire ou de la Littérature du Colportage*, t. I. G.-P Maisonneuve & Larose, s. d. p. 479. 筆者の使用テキストは複製本であり、発行年、発行所等の記載がないが、シャンフルーリの記すところでは1864年Dentu刊である。なお、使徒アナニアとあるが、『使徒行伝』第23-24章に出て来る大司祭である。
- (3) *Ibid.*, p. 479.
- (4) Champfleury, «Le Juif-Errant» in *Histoire de l'Imagerie populaire*, nouvelle édition (revue et augmentée), E. Dentu, 1886, p. 5.
- (5) *Ibid.*, p. 2.
- (6) *Ibid.*, pp. 9-10.
- (7) *Histoire admirable du Juif Errant*, Phénix Editions, 2001 (Reprise de l'édition Baudot, Troyes, s.d.), p. 16. (以下 Troyes とする)。
- (8) *Ibid.*, p. 20.
- (9) *Ibid.*, p. 4.
- (10) Nizard, *Op. cit.*, p. 481.
- (11) *Ibid.*, p. 16. なお、青本における地名の表記はしばしば不正確で、特定不能のものもある。
- (12) Troyes, pp. 11-12.
- (13) *Ibid.*, p. 12.
- (14) *Ibid.*, p. 13.
- (15) *Ibid.*, p. 11.
- (16) Champfleury, *Op. cit.*, p. 24.
- (17) Troyes, p. 6.
- (18) *Ibid.*, p. 15.
- (19) Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, «Complainte».
- (20) Brigitte Buffard-Morel, «Aspect et sens des répétitions dans *Les Complaintes*

de Jules Laforgue» in *Les Complaintes, Jules Laforgue*, ouvrage dirigé par Daniel Delas, François-Charles Gaudard, ellipse, 2000.

(21) Troyes, pp. 19–20.

(22) Champfleury, *Op. cit.*, p. 38.

(23) Pierre Dupont, *La Légende du Juif Errant*, Michel Lévy Frères, 1856, p. 13.

(24) Anne-Claude Lelieur et Raymond Bachollet, *Eugène Ogé Affichiste*, Agence Culturelle de Paris / Paris-Bibliothèques, 1998, p. 81.

(25) Pierre Louis Duchartre et René Saulnier, *L'Imagerie populaire*, Librairie de France, 1925, p. 227.

——文学部教授——